

閑窓漫筆

美知代

静かに寝れて雨聲を聴く。此夜すでに更けてまた人語なき處、その音綿々わが心を穿ちて真底に秘めし眞韻と和するに似たり。

あ、憶ふ、わが心は恒に激しき響に傷められたる也、人の生の成敗を暗する叫喚を聞いては胸を惱まし姦迷妄語の憂たてきを耳にしては口惜しと朱唇を咬み、

朝々暮夜、はしたなく騒々しき生類の音聲に小さき腸を揉まれたるわれは、却て此雨聲に蘇へれるを覺る也。

初め眼を張り眸を睜して聴く、雨、われの外部にありなごころ半眼を閉ち丹田を靜めて聴く、聲わが皮肉に接す。遂に跪座より轉じて床に横ばり、瞑目沈想して悠々の境に入るの刹那、あゝ何等の奇妙ぞや、雨聲滴々として念心一縷の間を流れ、その聲、その音、直ちにわが内部を叩くものゝ如し。

雨聲却て我が嘆聲。

我れ却てこの雨聲。

奇なるか如くにして奇ならざる此の消息は我れをしてはしなく初心一如の大法に復る事を得しめ、更に心空潤達たる虚無本然の大境を色味するを得しめぬ。

請ひ聞はむ、此夜遠征萬里異域に劍を枕する底の人、乃至一切人界の同胞、三更より雨に聽いて五更に臻るの風流心在りや無しや。

○ 西の京に入りたるは明治三十六年の秋なりき。

平安の舊都、四山愛護の裡に横はつて加茂の長流を

抱く。我が心こゝに初めて父母の膝下に歸せるものゝ如かりき。春朝秋夜。花と園子と、紅葉と月と、こは京都が享けたる天の資なり。唯恨むらくは絃聲絲韻ひとり擅に三十六峰の麓を汚し、東西兩本願寺の金殿佛閣、祖肉師血の膾汁を人に饜むる事や。

一日吟箚飄として家を出づれば、歸るの道を惜むで勝に入り著に出で、媚を追ひ秀を探れて風露を荷ひ、詩囊漸く量に堪へずして蘆に向ふ。京はあらゆる處に吟士の家を作る、

月に好き如く虫に好きも京なり、花に眩まざるゝ如く山水に惹かざるゝも京なり、われは京の地を撰んで骨を埋めむかなと想ひぬ。

あゝ僞しかりし京よ、われは紅の産地たる京を忘れじ、

○ 京を出でたるは明治三十八年の秋なりき。

枕を擁して寝たり難き夜、試みに筆を拈して案に凭る、文成らずして却て寝を催す、机に對して睡顔りに襲ふの時、希くは文人筆を呵して想を展べよ、金聲自ら振々、その夜遂に夢をなまざるの狀を得む。